

# 『雨月物語』 「青頭巾」 における 「肉」 という語について

小野寺 貴之

## 一、「青頭巾」 作中における 「肉」 という語 についての岡崎淳一氏の論

上田秋成が著した『雨月物語』の巻之五に収められた「青頭巾」のあらまはは次のようなものである。

愛する童児を失い、その屍を喰い果てた僧である院主が、村の墓を暴き屍を喰らうようになった。村を通りかかった僧、快庵は村の荘主から話を聞き、院主を「教化」しようと荒れた寺へ向かう。

こうした内容のため、作中には肉を喰らうエピソードや「肉」の語を用いた対話が随所に見られる。

この「青頭巾」作中に用いられている「肉」の語について分類を試みたものとして、岡崎淳一氏の「『青頭巾』論」がある。その中で岡崎氏は「肉」という語の出てくる場面を次のA～Fに分類している。

- A 其肉の腐り爛るを吝みて、肉を吸、骨を嘗て、はた喫ひつくしぬ。
  - B 麻叔謀といふもの、小児の肉を嗜好て、潜に民の小児を偷み、これを蒸て喫ひしもあなれど、もし飢給ふとならば、野僧が肉に腹をみたしめ給へ。
  - D 我あさしくも人の肉を好めども、いまだ仏身の肉味をしらず。
  - E かの青頭巾と骨のみぞ草葉にとどまりける。  
〈肉体の不在〉
  - F 初祖の肉いまだ乾かずとぞ称歎しけるとなり。
- 以降、岡崎氏のこの分類をお借りして検討していくため、それぞれの場面について状況の補足を加える。
- Aは、通りすがりの快庵に対して、院主の行いに悩まされている村の荘主が、どのようにして院主が屍を喰ら

うようよになったか、その話をしている場面である。ここで扱われている「肉」は、院主に愛され、そして死後に「喫ひつく」された童児の肉である。

Bは、莊主の話を聞き終えた快庵が、人肉を喰らう人物のエピソードを語る場面である。話は隋の煬帝の臣下「麻叔謀」の話であり、明の時代の随筆『五雜俎』に見られる話である。

Cは、快庵が院主の寺で一夜を過ごした後の場面である。夜に快庵を求めて躍り狂った院主が、疲れ果てて伏したまま朝を迎えているのに対して快庵がかけた言葉。全文は「院主何をか歎き給ふ。もし飢給ふとならば、野僧が肉に腹みたしめ給へ」となる。

Dは、Cの言葉に対して院主が応じた言葉である。Cに続く場面を引用する。

あるじの僧いふ。「師は夜もすがらそこに居させたまふや。禪師いふ。「こゝにありてねふる事なし」。あるじの僧いふ。「我あさましくも人の肉を好めども、いまだ仏身の肉味をしらず。師はまことに仏なり。鬼畜のくらしき眼をもて、活仏の来迎を見んとするとも、見ゆべからぬ理りなるかな。あなたふと」ゝ頭を低て黙しける。

Eは、Dの場面で快庵が院主に証道歌二句を授け、「汝こゝを去らずして徐かに此の句の意をもとむべし。意解けぬる則はおのづから本来の仏心に会ふなるは」と言い聞かせた一年後のことである。院主は一年後もその場で証道歌を唱え続けており、それを見た快庵が一喝して院主の頭を打った後の場面となる。

忽水の朝日にあふがごとくきえうせて、かの青頭中と骨のみぞ草葉にとゞまりける。現にも久しき念のこゝに消じつきたるにやあらん。たふときことわりあるにこそ。

Fは、Eに続く結尾の文章に含まれるものである。

されば禪師の大徳、雲の裏海の外にも聞えて、初祖の肉いまだ乾かずとぞ称歎しけるとなり。かくて里人あつまりて、寺内を清め、修理をもよほし、禪師を推たふとみてこゝに住しめけるより、故の密宗をあらためて、曹洞の霊場をひらき給ふ。今なほ御寺はたふとく栄えてありけるとなり。

岡崎氏は、これらA～Fの「肉」という語について、「物理的」と「宗教的」の二つに分類することを試みて

いる。A、Bにおける「肉」を「物理的な肉」、Fを「宗教的な意味を持った悟りの象徴」、CとEを留保付きではあるが「物理的な肉」とし、Dの中に出てくる二つの肉の意味を、院主という一人の台詞から出ているにも関わらず、不統一であると解釈している。

Fを〈宗教的な意味〉を持つとした根拠として、岡崎氏は達磨大師と弟子の「祖云、汝得我肉」というやりとりを紹介している。これは『景德伝燈録』の第三卷、「第二十八祖菩提達磨」に記され、<sup>5)</sup>『正法眼蔵』の「葛藤」の巻にも引かれた言葉である。こちらも前後の部分を引き用する。<sup>6)</sup>

第二十八祖、謂門人曰、時将至矣、汝等盍言所得乎。時門人道副曰、如我今所見、不執文字、不離文字、而為道用。祖曰、汝得吾皮。尼総持曰、如我今所解、如慶喜見阿闍佉国、一見更不再見。祖曰、汝得吾肉。道育曰、四大本空、五陰非有、而我見处、無一法可得。祖曰、汝得吾髓。果為二祖、伝法伝衣、依位而立。祖曰、汝得吾髓。果為二祖、伝法伝衣。  
〈第二十八祖、門人に謂て曰く、時將に至らんとす、汝等盍ぞ所得を言わざるや。時に門人道副曰く、我が今の所見の如きは、文字を執せず、文字を離れず、しかも道用をなす。祖曰く、汝、吾が皮を得たり。

尼総持曰く、我が今の所解の如きは、慶喜が阿闍佉国を見るに、一たび見て更に再見せざるが如し。祖曰く、汝、吾が肉を得たり。更不再見。道育曰く、四大本空なり、五陰、有にあらざ、しかも我が見処は、一法として得べき無し。祖曰く、汝、吾が骨を得たり。最後に慧可、礼三拝して後、位に依って立つ。祖曰く、汝、吾が髓を得たり。果して二祖となして、伝法・伝衣せり。

達磨大師より、四人の弟子がその得たるところを問われ、その回答に対して達磨が反応する場面である。この場面における「肉」は、他の皮、骨、髓と同様に達磨の何がしかを受け継いでいるという意味になる。こうした文脈を踏まえ、岡崎氏はF「初祖の肉」の「肉」を、〈宗教的な意味〉を帯びると判断している。本稿もこれに従う。

岡崎氏は「肉」という単語の不統一性に積極的な意味を見出し、物語中の院主の在り方に重ねようとしている。その上で岡崎氏は、「肉」という意味が分裂していることについては、語りの性質によるものと考察している。このような、作中に出てくる複数の「肉」の語のイメージについての考察はその後、小椋嶺一氏が「秋成『青頭巾』論」の結びで、

童児の肉、野僧の肉、仏身の肉、初祖の肉などと、「肉」という表象は同じでも指し示すところは大きく違うかのように見せながら貫徹するものは、「直ぐたくまじき性」とする秋成自身の認識がこの作品に異彩を放たしめているのである。

と、「肉」のイメージが不統一であるという同様の問題意識を提示している。

本稿では、岡崎氏が示したA～Fの場面分けと「物理的な肉」(宗教的な意味)という分類に従いながら、『青頭中』における「肉」のイメージの不統一性についての検討を試みることを目標とする。

## 二、「肉」の語の発語される階層による分類

「青頭中」は話が入れ子状となっており、一番外郭の語りが快庵を称揚する高僧伝の形をしているというのが先行研究から続く認識となっている。その中に話のメインとなる快庵と院主の対決の話があり、さらに登場人物である快庵と荘主によって「院主の屍喰いの話」と「人肉を喰らう人物のエピソード」が語られるという三層構造である。こうした構造の一番外側を上層、一番内側を下

層、その間を中層と仮定すると、

上層…高僧伝(語り手)

中層…快庵と院主の対決

下層…快庵と荘主の語る話

となる。ここに、前に示した岡崎氏の「肉」のイメージの分類を対応させると、三層に均等に振り分けることができる。また同時に、それは「肉」というイメージの出現する序盤、中盤、終盤に位置していることがわかる。

上層／終盤…EとF

中層／中盤…CとD

下層／序盤…AとB

このように、岡崎氏が示した「物理的な肉」(宗教的な意味)以外にも、「肉」という言葉の語られている階層によって、三つのグループ分けが可能である。以降、順に検討していく。

A 其肉の腐り爛るを咨みて、肉を吸、骨を嘗て、はた喫ひつくしぬ。

↓(荘主による「稀有の物がたり」)

B 麻叔謀といふもの、小児の肉を嗜好て、潜に民の小児を偷み、これを蒸て喫ひしもあなれど、

↓(快庵による作中の説話引用)

AとBは作中、高僧伝の登場人物が語る物語の中に登場する語として語られたグループである。そこで示される「肉」の意味は話者である莊主と快庵の目的から、人肉を食べる異常さについて語られるためのものである。特に宗教的な意味を示していると思われるため、岡崎氏の分類を対応させると(物理的な肉)として処理できる。また、AとBは「肉」というイメージが出現する順序としては序盤の語である。そのため、読者の視点からはこの、異常者による人肉喰いという劇中説話の視点が最初の「肉」のイメージに付されることになる。

C もし飢給ふとならば、野僧が肉に腹をみたしめ給へ。

↓(快庵による作中の会話)

D 我あさましくも人の肉を好めども、いまだ仏身の肉味をしらず。

↓(院主による作中の会話)

次にCとDであるが、これは作中の登場人物である快

庵と院主の直接の対話として記されているものである。

CとDはその間に一往復の対話を挟んでいるものの、繋がりとしては直接対応していると読める部分である。

Cの「肉」については、単に快庵が自身の肉を差し出したとすれば、AとBが序盤で形成した文脈に属する(物理的な肉)とも解釈できる。しかしながらこのときの快庵の行為は、宗教的な意味をもって理解することが可能なものとして考察されてきている。先行研究ではそのイメージの典拠が推測されており、自らの肉を割き与えようとする仏の慈悲を示す説話と重なるものとして解釈されている<sup>(8)</sup>。こうしたイメージが秋成と読者の間に共有されていけば、Cの「肉」は、直接的には快庵が院主の物理的な「飢え」に対応しようとしたとする(物理的な肉)として見えつつも、高僧伝の枠組みで捉えたときに快庵の聖性を示す場面として、(宗教的な意味)を帯びたものとして読むことができる。

Dについては、多重の意味を含み誤読を誘う文であるとする見解が、西田勝氏「もう一つの骨―青頭巾―私想稿―」に見られる<sup>(9)</sup>。

「飢」という語の後に「肉を好」とあることが、もう一つの目晦ましとなっているのではないだろうか。第一の食人、即ち院主による童児のそれ。

第二の食人、即ち院主による里人・屍のそれ。

ここで西田氏は、作者によるミスリードの可能性を示唆している。西田氏の言うように「飢」という言葉が快庵から発せられ、また単に肉体上の「飢」として処理しきれない会話が後に続いていることには注意が必要であろう。例えば『聖徳太子伝』では、飢えた旅人として達磨が登場するが、その達磨に太子が与えた詠歌の「飯に飢へて」という部分は「禅味にうへたる衆生」のことだと説明している。このDに現れる二つの「肉」の意味するところを岡崎氏は次のように処理している。

まず、「人の肉」を悟りの象徴として捉えることは不可能だろう。それはやはり、院主によって喰らわれてきた稚児や村人の肉と強く結びついている。しかし、その直後にあらわれる「仏身の肉味」における肉については、やはり「初祖の肉いまだ乾かず」における肉と同様に悟りの象徴として取ることが妥当だろう。

岡崎氏の言うように、最初の「人の肉」は読みの流れからすればA、Bからの文脈に属する〈物理的な肉〉の意味を有して見える。しかしながら次に来る「仏身の肉味」

が〈宗教的意味〉を帯びるCの「野僧が肉」と対応して見ると、「人の肉」はそれと対比される、悟りに至る前の状態を示す〈宗教的な意味〉を持っていると捉え直すことができる。⑩「人の肉」は、読み手の文脈によって左右される二重の意味を持っていると言える。

E かの青頭巾と骨のみぞ草葉にとゞまりける。〈肉体不在〉

↓(語り手)

F 初祖の肉いまだ乾かずとぞ称歎しけるとなり。

↓(語り手)

最後がEとFである。これは物語の一番外郭を覆う語り手による表現であり、Fが岡崎氏の言うように〈宗教的な意味〉を持つことには疑いの余地がないであろう。

Eについては、まず「肉」のイメージとして妥当かというところから検討しなければならない。この場面に就いては、「青頭巾」の研究上様々な視点があり、院主の執心や解脱の是非に絡めて解釈される一方、「肉」のイメージの文脈からは快庵によって〈喰われた〉院主の姿であるという解釈もある。例えば永井裕司氏による⑪

院主は人の肉を喰うことにより、多くの人間を骨だ

けの姿にしてきたわけである。その院主が最期に自らも骨だけの姿となっている。これが肉を喰うという行為と無関係とは思えない。院主の骨が残ったことは間接的に快庵が院主を喰ったことを表しているのだ。

との読みがある。本稿では、院主が快庵の一喝によって解脱したか、していないかという、Eの場面についての「青頭巾」研究上で見解が分かれてきた論点には踏み込まず、「肉」という言葉やイメージの使われ方について検討していくこととする。右に挙げた永井氏の解釈同様、「青頭巾」が「肉」という語を繰り返し扱ってきたことから考えて、このEの場面は骨に焦点が当たったのではなく、〈肉体の不在〉を想起させるという岡崎氏の分類には頷けるものがある。後藤丹治氏の「雨月物語『青頭巾』の「典據」での紹介以降、この場面の有力な典拠の一つとして目されている、『都鳥妻恋笛』五の巻「粹自慢の天狗も鼻を突く大夫が仕懸」の終盤は次の通りである。

天狗坊班女の姿のかはり果てたる体を見て、忽ち染着せし愛念去ると、はつといふ声の下より、肉身朽ちて霜の消ゆるごとく、四大分散してただ一連の白骨となる。残る物は頭巾すずかけ衣装ばかり。執心

こりかたまつて、その念にてこれまで具足してありし形、愛着の念消ゆるとともに、仮の五体も消へ失り。

ここに見られるように、骨が残るというイメージの前には「肉身朽ち」という前提があるはずである。

こうして岡崎氏の言うようにE「かの青頭巾と骨のみ」に対して〈肉の不在〉のイメージを重ねられる一方、同じく語り手の文脈で語られるF「初祖の肉」は、非常に生々しい「いまだ乾かず」という語が示す通り、消えていない肉のイメージを持たせており、EとFは対比される構造にあると読める。「青頭巾」の外郭としての高僧伝の語り手の視点では、この結部の「初祖の肉いまだ乾かず」という言葉こそが快庵の行為を称揚し意味づける最も重要な言葉であり、その後も「たふとく榮えてありける」曹洞の霊場の正統性の源泉となるはずである。このFの「肉」が〈宗教的な意味〉を孕む以上、対比の構造にあるEも〈宗教的な意味〉を帯びると推測できる。

以上のことを改めて整理する。

「肉」という語に色濃く〈宗教的な意味〉が伴うのは、話の構造上最も外郭の語り手の言葉に位置し、また読者にとって最も終盤に位置するFである。また、Eに〈肉の不在〉のイメージがあるとすると、これも同様に〈宗

教的意味合いを持つと推測できる。

「肉」という語が色濃く〈物理的な肉〉を意味しているのは、話の構造上最も内部に位置し、また読者にとって最も序盤に位置する劇中話の中のA、Bである。これらの「肉」のイメージには、異常な者による人肉食という属性を強調する役割がある。

そして、この二つの層の中間に位置するのは、中盤のCとDである。

この層は、AとBで語られた人肉食の文脈の影響を受ける位置にある。しかしながら、「肉」のイメージを最も外郭の語りで覆う結末部のEとFに到達した読者からは、「宗教的」意味を帯びた対話としても捉えなおすことができる。そしてそのどちらの文脈で捉えるかによって、岡崎氏の言うように院主の人物像が変化して見えると思われる。

「青頭巾」の入れ子状の階層は、少なくともそれぞれの階層に属する「肉」の語が持つ役割と対応させて考えることができる。入れ子の一番内側では「肉」は物理的な人肉を喰うこととセットのイメージであり、最も外郭では宗教的な象徴を帯びる。中間に位置する快庵と院主の対話は、読者の視点からすればその双方に影響を受ける形で存在していることになる。

### 三、「肉」の語の所在について

もう一点留意しておきたいこととして、岡崎氏が分類したEが属する一文に、「肉」の一語がなぜ存在しないのか、という疑問がある。

先行研究が示す、有力な典拠として目される類例には、必ず消える対象としての「肉」の一語が添えられている。『都鳥妻恋笛』は前に示した通りであるが、『金玉ねぢぶくさ』巻之一、「讚州雨鐘の事」では

肉身くちて霜のきゆるごとく、四大分散して、  
たゞ一連の白骨となる。衣を取あげて見れば、灰の  
ごとくはら〜と消うせぬ。誠に一念五百生けねん  
無量劫、おそるべく慎べきは愛着なり。<sup>16)</sup>

と、朽ちる対象である「肉身」が示されている。また『老嫗茶話』巻之七、「入定の執念」の結尾では

朝日に向ふ霜の如ごとく皮肉忽消失て、一具の白  
骨斗残たり。誠に人の執心程おそろしきものはなし。<sup>17)</sup>

と、消失した「皮肉」を示している。

対して、「青頭巾」においてEの属する一文、

忽氷の朝日にあふがごとくきえうせて、かの青頭中と骨のみぞ草葉にとどまりける。現にも久しき念のこゝに消じつきたるにやあらん。

には「肉」の一語が存在しない。仮に作者の念頭にこれら類例の定型があったとすると、「肉」の語が含まれていない文となることの方が不自然に思われる。この「肉」の語の不在には、例えば「影のやうなる人」となった院主に対して、あるいはこの場面に對して、「肉」の語を使わないという作者の意思を想定できる。

また、Eとは異なり「肉」の語を直接含む文章であるA、B、C、D、Fは、物語中の階層からすれば、前節で見えてきたようにAとB、CとD、そしてFというように分けることができるが、これらは「青頭巾」上の最も外郭の存在である語り手からみると、全て他者の発言に属するものである。つまり、語り手は「肉」の語を自分の言葉としてはいっさい発しない構造になっている。

Aは莊主の語る説話、Bは快庵の語る説話、Cは快庵の発言、Dは院主の発言に属する。そしてFは、快庵を評価する高僧伝の形式を支える語り手の階層に属するものであるが、厳密には語り手が伝え聞いた、快庵の行いを称揚する人々の声である。「初祖の肉いまだ乾かず」

とは、直接に語り手が快庵を称揚した評語ではない。語り手が直接評価したような書き方もできたであろうが、作者はそうはしていない。語り手が自分の言葉として「肉」の語を発していないことについては、単なる偶然かもしれないが、「青頭巾」作中の「肉」の一語の在処について、作者の慎重な操作があった可能性については留意する余地もあると思われる。

「青頭巾」では、すべて「肉」の語は語り手が他人の言葉を引用してきたという形で存在している。そのため「肉」の語の意味も各々の背景の文脈に沿って存在しており、その意味で不統一は必然である。また、語り手が直接自分の言葉で「肉」の一語を発しない構造上、物語中に高い次元で統一された「肉」の意味付けがされることもない。

こうした「青頭巾」における語り手の責任の曖昧さについては井上泰至氏が<sup>18)</sup>

本作の「語り」は、聖性、規範性をもった本来的「語り」に擬しつつ、語られる内容の事実性に責任を取るべき主体を消してしまったか、あるいは無化したものといつてよい。

とまとめているが、「肉」という語の不統一さはこうし

た語りの性質にも因るものと考えられる。

語り手による物語中の「肉」の意味の統一はされなくとも、作者である秋成が「肉」という語を、序盤、中盤、終盤で、また語られる階層によって役割の異なる配置をしており、またその所在についても慎重な操作があった可能性については言えるのではないか。

【注】

- (1) 岡崎淳一『「青頭巾」論』『大学院研究年報 第27号 文学研究科篇』一九八八年二月 中央大学大学院研究年報編集委員会
- (2) 前掲岡崎論文(一九八八)、一一九頁
- (3) 『大学古典叢書 新註 雨月物語』高田衛 稲田篤信 編著 一九八五年四月 勉誠社
- 前掲の岡崎論文(一九八八)では、本文の引用を勉誠社の高田・稲田版に拠っているため、以降特別な表記のない限り『雨月物語』本文の引用をこれにあわせる。
- (4) 前掲岡崎論文(一九八八)、一一九頁上段
- (5) 『五山版中国禅籍叢刊 第一卷』椎名宏雄 編 二〇一二年七月 臨川書店 二六頁
- (6) 『道元禅師全集 第一卷』河村孝道 校註 一九九一年一月 春秋社 四一七頁
- (7) 小椋嶺一『秋成『青頭巾』論』『日本近世文学研究の新領域』宗政五十緒 編 一九九八年五月 思文閣

二四八頁

- (8) 『雨月物語評釈』鶴月洋著 一九六九年三月 角川書店の「青頭巾」六一九頁「補説」には、『今昔物語集』巻第五の第七話、「波羅奈国羅睺大臣擬罰国王語第七」や第十三話「三獸行菩薩道鬼焼身語第十三」を挙げている。
- (9) 西田勝「もう一つの骨―『青頭巾』私想稿―」『江戸文学 第一〇号』一九九三年四月 ぺりかん社 一三六頁―一三七頁
- (10) 『聖徳太子伝』杉本好伸 著 二〇一一年二月 国書刊行会 三七〇頁
- (11) 前掲岡崎論文(一九八八)一一九頁下段
- (12) 例えば先行研究に「ここで対置されているのは仏／人という対立項」であるという読みがある。『三弥井古典文庫 雨月物語』田中康二 木越俊介 天野聡一 編 二〇〇九年十二月 三弥井書店 二二四頁
- (13) 永井裕司『「雨月物語」青頭巾の論―分身説と食屍の隱喩―』『愛知大學國文學 第43號』二〇〇七年十一月 愛知大學國文學會
- (14) 後藤丹治「雨月物語『青頭巾』の―典據―」『国語国文 第十七卷七号』一九四八年十月 京都大學文學部國語國文學研究室
- (15) 『江戸怪談文芸名作選 第一卷 新編浮世草子怪談集』木越治 校訂代表 二〇一六年八月 国書刊行会 四一八―四一九頁。

- (16) 『叢書江戸文庫34 浮世草子怪談集』木越治 校訂  
一九九四年十月 国書刊行会 二五八頁
- (17) 『叢書江戸文庫26 近世奇談集成(一)』高田衛 校  
訂代表 一九九二年十二月 国書刊行会 一七六頁
- (18) 『雨月物語の世界―上田秋成の怪異の正体―』井上  
泰至著 二〇一三年五月 角川学芸出版 一五〇頁

また、典拠については井上泰至「『雨月物語』典拠一覧」  
『秋成文学の生成』飯倉洋一 木越治 編 二〇〇八年  
二月 厚徳社 を参照した。

(おのであら たかゆき 本学大学院  
博士前期課程 令和二年度修了)

